

ちようと三つの石

小川未明

青空文庫

あるところに、まことにやさしい女がありました。女は年ごろになると、水車屋の主
 人と結婚をしました。

村はずれの、小川にかかっている水車は、朝から晩まで、唄をうたいながらまわつて
 いました。女も主人も、水車といっしょに働きました。

「なんでも働いて、この村の地主さまのように金持ちにならなければだめだ。」と、主
 人は頭を振りながら、妻を上げますようにいいました。

妻も、そうだと思いました。そして、それよりほかのことをば、考えませんでした。春
 になると、緑色の空はかすんで見えました。木々には、いろいろの花が咲きました。

小鳥は、おもしろそうにこずえにとまってさえずりました。

夏になると、真っ白な雲が屋根の上を流れました。女は、ときどき、それらのうつりか
 わる自然に対して、ほんやりながめました。

「ぐずぐずしていると、じきに日が暮れてしまう。せつせと働かなけりやならん。」
 と、そばから主人に促されると、気づいたように、また、せつせと働きました。

女は、一日、頭から真っ白に粉を浴びて、働いていました。二人は、まだ、楽な日を送

らないうちに、主人は、病氣にかかりました。そして、その病氣は、日に日に、重くなるばかりでした。

医者は、ついに恢復の見込みがないと、見放しました。そのとき、主人は、この世を見捨ててゆかなければならぬのを、なげきましたばかりでなく、女は、夫に別れなければならぬのを、たいへんに悲しみました。

「俺は、おまえを残して、ひとりあの世へゆくのを悲しく思う。けれど、もうこうなつてはしかたがない。先にあの世へいつて、おまえのくるのを待っているから、おまえは、この世を幸福に暮らしてからやつてくるがいい。」

と、主人は、涙ながらにいいました。

女は、泣いて聞いていましたが、

「どうか、わたしのゆくのを待つていてください。あの世へゆくには、山を上るといいますから、峠のところで、わたしのゆくのを待つていてください。」と、女はいいました。

主人は、安心してうなずきました。そして、ついにこの世から立つてしまったのであります。

女は、泣き悲しみました。しかし、どうすることもできませんでした。その日から、一

人ととなつて働はたらいていました。

水車すいしやの音おとは昔むかしのように、唄うたをうたつてまわつていましたけれど、女おんなはけつして、昔むかしの

日ひのように幸こころ福ふくでなかつた。

女おんなは、一人ひとりで生せい活かつすることは困こん難なんでありました。それを知しつた村むらの人ひとは、気きの毒どくに

思おもいました。

「おまえさんは、まだ若わかく、美うつくしいのだから、お嫁よめにゆきなさるがいい、ゆくならお世せ話わ

をしてあげます。」と、女おんなに向むかつて、しんせつにいつてくれるものもあつた。

女おんなは、夫おつとが死ぬしるときに、先さきへいつて待まつていて待つていてという、約やく束そくをしたことを思おもい出だすと、

そんな気きにはなれませんでした。

「死しんだ主しゆじん人たいに對たいしてすまない。」と、女おんなは答こたえました。

しかし、村むらの人ひとは、女おんなのいうことをかえつて笑わらいました。

「人間にんげんというものは、死しんでしまえば、ろうそくの火ひの消きえたようなものだ。それより

も、生いきているうちがたいせつなのだから。」と申もうしました。

女おんなは、そうかと思おもいました。急きゆうに、心こころ細ほそいような感かんじがして、ついに、お嫁よめにゆく

気きになつてしまいました。

おんな 女は、機織りの家に、二度めに嫁いだのであります。そして、今度は、一日じゆう機を織つて、夫の仕事を助けました。夫は、また、妻をかわいがりしました。女は、前に水車場の男に嫁いだ日のことを忘れて、いまの夫を、なによりもたいせつに思うようになりしました。

おんな 女は、織物の入った、大ぶろしきの包みをしよつて、街道を歩いて、町へ出ることもありません。頭の上の青空は、いつになつても変わりがなかつたけれど、また、その空を流れる白い雲にも変わりがなかつたけれど、女のようにすは変わつていました。

すいしやば 水車場には、知らぬ人が入つて住まうようになりました。

わか 「若いうちに、うんと働いて、年をとつてから楽な暮らしをしたいものだ。」と、二番めの夫はいいました。

かのじよ 彼女も、また、そう思いました。

「ほんとうに、そうでございます。」と、女は答えた。

そして、夫婦は、いっしょうけんめいに、家業に精を出したのであります。四、五年たちました。

すると、夫が病氣にかかりました。病氣はだんだんと重くなつて、医者にみてもら

うと、とても助たすからないということでありました。

夫おつとは、死しんでゆく自分じぶんの身みの上うえを悲かなしみました。女おんなは、また、夫おつとに別わかれなければならぬのをなげきました。

「私わたしが死しんでしまつたら、後あとでどんなにおまえは困こまるだろう、しかし正しょう直じきにさえ働はたらいていれば、この世よの中なかにそう鬼おにはない、あまり心しん配はいしないほうがいい。」と、夫おつとは、悲かなしみに沈しずんでいる妻つまをなぐさめていいました。

「わたしは、自分じぶんのことを思おもつて、悲かなしんでいるのでありません。あなたにお別わかれしなければならぬのが悲かなしいのです。」と、女おんなは答こたえました。

「なに、私わたしは、あの世よへいつて、おまえのくるのを待まっている。おまえは、できるだけ、この世よの中なかを幸こう福ふくに送おくつてくるがいい。」と、夫おつとはいつた。

「あの世よへいくときには、なんでも高たかい山やまを上のぼるそうです。どうか、その峠とうげのところで待まつていてください。」と、女おんなはいいました。

夫おつとは、うなずいて、なんの心こころ残こころりもなく、ついにこの世よを去さつてしまつたのです。

女おんなは、また一人ひとりになりました。そして、たよりない日ひを送おくらなければならなくなりました。村むらの人ひとは、この不ふしあわせの女おんなに同どう情じょうをしました。

「まだ若いんだから、いいところがあつたら、お嫁にいった方がいい、お世話をしてあげます。」と、村の人はいった。

「そんなことをしては、死んだ夫にすみません。」と、女は涙ながらに答えました。

「すむも、すまないもない。死んでしまった人は、消えたも同じものだ。あの世などというものは、まったくないものです。」と、村の人はいいました。

女は、ほんとうにそうかと思いました。そして、人にすすめられるままに、三たびお嫁にゆきました。

三度めにいったのは、鳥屋でありました。そこへいつても、彼女はよく働きました。鳥に餌をやったり、いろいろ鳥の世話をしました。月日は早くもたつて、すでに三たび結婚をしてから、十年あまりにもなりました。すると、夫はあるとき、病気にかかりました。彼女は、よく看護をいたしました。けれど、そのかいもなく、夫の病気は、だんだん重くなるばかりでした。

「おまえを後に残していくのは、このうえなく悲しい。けれど、これも運命だからしかたがない。おまえは、あの鳥のめんどろを見てやったら、どうにか暮らしていけないことはない。」と、夫はいいました。

「ほんとうに悲しいことです。わたしは、もつと鳥のめんどろを見てやりませう。そして、一日も早くあなたのところへゆかれる日を待っています。」と、女は答えました。

「それで安心をした。どうか達者で、幸福に日を送ってくれい。きつと、私は、待っているから。」と、夫はいいました。

「あの世へゆくには、高い山を越さなければならぬそうです。どうか峠でわたしを待っていてください。」と、女はいいました。

男はうなずいて、ついにこの世から去ってしまいました。女は夫の亡くなってしまった後、よくその家業を守りました。それから、また長い月日がたちました。女は年をとりました。そして、いつか女自身が、墓にゆく日がきたのであります。

女は、仏さまに、どうかあの世へどこおりなくいけるようにと祈りました。そして、ついに目を閉じるときがきました。

女は、この世を去ったのです。けれど、靈魂は女の念じたように、あの世へゆく旅に上りました。

女は、長い道を歩きました。うららかに日が当たって、野も、山も、かすんで見えました。夢の国の景色をながめたのであります。女は、やさしい仏さまに道案内をされて、

広い野原の中をたどり、いよいよ極楽の世界が、山を一つ越せば見えるというところまで達しました。

「さあ、もうじきだ、この山を越すのだ。」と、仏さまはいわれました。

女は、青竹のつえをついて、山を上りはじめました。やがて、峠に達しますと、そこに三人の男が立つて待っていました。三人は、自分たちの待つてゐる女が、この一人の女であるということを知りませんでした。三人は、女を見ると、

「おまえのくるのを待つていた。」と、三方から寄つてきました。女はびっくりしてしまいました。よく見ると、第一の夫と、第二の夫と、第三の夫であつたのです。

女は、どちらへいつていいか、まつたくわからずに途方にくれてしまつた。

「俺は、長い間、どんなにおまえを待つたかしのれない。」と、第一の夫がいました。

「私は、いちばん最後におまえと別れたのだ。おまえは私といつしよに、あの世へゆくのがほんとうだ。」と、第三の夫がいました。

「おまえは、私といつしよに、あの世へゆくといつて約束をしたじゃないか。」と、第二の夫がいました。

女は、まつたく途方にくれてしまいました。

このようすを、ほとけ 仏さまはごらんなされていました。

「おまえは、わるき 悪気のある女おんなではないが、そういつて、三人に約束やくそくをしたのはほんとうか。」と、ほとけ 仏さまは、女おんなにたずねられました。

「わたしが悪わるうございます。そういつて、三人に約束やくそくをしました。けれど、心こころからうそをいう気きでいったのではございません。一時じは、あの世よがあることを信しんじました。一時じは、あの世よがあるかどうかを疑うたがいました。」と、女おんなは申しました。

ほとけ 仏さまは、しばらく黙だまつて考かんがえていられましたが、

「おまえは、三人にんの中で、いちばんどの人ひとを愛あいしているか？」と、お聞ききになりました。

女おんなは、かつて、いちばんどの人ひとを愛あいしているかを心こころに考かんがえたことがないので、返答へんとうに困こまっていました。すると、ほとけ 仏さまは、

「おまえは、どういような気持きもちちで、たびたび結婚けっこんをしたのか。」と、おたずねになりました。

女おんなは、自分じぶん一人で暮くらしてゆけなから結婚けっこんをしたとも、気恥きはずかしくて申もうされませんでした。

「そんな信仰しんこうのないものは、あの世よへゆくことはできない。おまえは、ちようになつて、

もう一度下界へ帰つて、よく考えてくるがいい。そして、ほんとうにまどわなない悟りがついたら、そのとき、あの世へやつてやる。」と、仏さまは女に申されました。

また、仏さまは、三人の男に向かつて、

「女がほんとうに悟りがついて、永久に変わらない自分の夫を見分けがつくまで、ここに待つているがいい。」といわれました。

やがて、女の姿は、ちようとなりました。そして、夕日の空に向かつて、どこへとなく飛んでゆきました。

三人は、峠で、十年、百年、幾百年と待ちました。そのうちに、三人は、三つの石になつてしまいました。けれど、下界に去つたちようは、いまだに悟りがつかないとみえて、花から花へと、美しい姿をして飛びまわつていて、帰つてこないであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「婦人倶楽部」

1921（大正10）年5月

※表題は底本では、「ちようと三つの石《いし》」となっています。

※初出時の表題は「蝶と三つの石」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：富田倫生

2012年5月23日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ちようと三つの石

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>